

# シニア学生の入学動機と入学後の学びの関連について

—— 質問紙調査の分析から ——

## About the Relevance of Entrance Motivation and After Admission Learning among the Over 50 Years Old Students

—— Analysis of Questionnaire Survey ——

飯 嶋 香 織  
行 木 敬

キーワード：シニア学生、高齢者、生涯学習、大学

### 要 旨

神戸山手大学では、50歳以上の方が正規の学部学生として入学できるシニア50+制度を2008年にスタートさせた。本論文はシニア学生を対象に、大学入学の動機や経緯と大学入学後の学びや大学生活との関連性を考察するものである。

大学への入学動機や期待は学ぶことだけでなく、人間関係の広がりへの期待から「何もすることがないから」「何もしないでいると呆けてしまうので」といった入学動機の方まで多岐にわたっていた。

シニア学生の入学の動機や期待と入学後の学びとの関連では、専門的な深い学びを動機にしている場合、大学での「学びの好循環」ともいえる特徴がみられた。しかし、一般教養的な学びを動機にしている場合、学びの面でも、また大学生の充実や人間関係の広がりの方でもあまり成果が出ない傾向がみられた。大学で新しい人間関係を動機としている人は、入学後の大学での学びにプラスの方向で影響があった。「何もしないでいると呆けてしまうと思ったから」のように入学動機が学び以外にある人の場合は入学後の学びそのものよりも大学生生活全体の充実や若い学生や留学生との交流を楽しんでいることが示唆された。

### 1. はじめに—神戸山手大学のシニア50+（シニア・フィフティ・プラス）制度

神戸山手大学では、50歳以上の学生を正規の学生として入学するシニア50+（シニア・フィフティ・プラス）制度を2008年にスタートさせた。本制度の導入から9年が経過し、2015年3月には5期目の卒業生を送り出し、2016年4月は9期生となる14名の新生を迎えた。

神戸山手大学現代社会学部は、2学科からなる文系中心の小規模大学である。神戸山手大学に入学したシニア学生は、語学、演習（ゼミ）なども含めすべての科目を一般の学生とともに受講し、卒業時には学士の学位を取得できる正規の課程を履修する。

入学資格は入学年度の4月1日現在で50歳以上の方（上限はない）であることで、入学選考は志望者のニーズと本学の教育内容に齟齬をきたさないことを目的としてAO方式で実施し、

筆記試験などは課していない。納入金のうち学費の40万円が4年間返済不要の奨学金として支給されるため、学費は実質的に減免されており、入学しやすい条件整備がなされている。

本制度を考えた当初<sup>1)</sup>は、団塊の世代の定年退職者や子育てが一段落したシニア層を入学者として想定していたが、実際に入学したシニア学生の内訳は多様で、年齢も50歳になったすぐに入学する学生、70代で入学する学生もいて、シニア1年生といっても年齢に20歳以上の開きがある。入学時点での最終学歴も高卒、短大卒、四大卒、大学院修了と多様で、職歴も様々である。入学時の状況は定年退職者や子育てが一段落した人だけでなく、定年前に退職された方もいる。

## 2. 本論文の先行研究—神戸山手大学での調査

2013年、私たちは神戸山手大学でシニア学生を対象にインタビュー調査を実施した<sup>2)</sup>。神戸山手大学に進学したシニア学生は、週1、2回のシニア講座のような「分離型」の大学ではなく、大学生としてフルに学べる「統合型」の大学への進学を選択した方々である。彼らに顕著にみられる傾向は、学ぶことそれ自体を目的と考え、そこに充実感を見出そうとする点であった。インタビューの中で「自分の関心外だった授業も、履修してみると色んなことに気づかされて、すごく視野が広がる」「周囲や裾野から全体的に学びたい」「勉強は知れば知るほど、さらにその先が知りたくなる」「どんな授業でも受けてみると面白さがみつかる」「勉強には、何かをやり遂げたという充実感がある。そしてその先に、自分の研究テーマというものが見えてくる」など、シニア学生は、単発の講座では見えてきにくい学問の広がりを実感し、学びを通してさらに学ぶ意欲が高まるという「学びの好循環」が生じているといえる。

次年度の2014年3月には、在学している全シニア学生を対象に質問紙調査を実施し、以下のことがあきらかになった<sup>3)</sup>。大学入学の理由や経緯では、視野を広げるや最新の知識を学びたいなど、学ぶことそれ自体を目的と考えていたこと、さらに大学への憧れといった大学生生活への漠然とした期待、生活全体を充実させたい気持ちが進学動機として大きかった。入学前の不安や障害として、経済的な問題や家族の反対の問題は少なく、入学試験に合格するのか、勉強についていけるかなどの大学での学びに関する事が多くを占めていた。入学後は大学での学びに概ね満足しているという結果が得られた。また学ぶことそれ自体を目的と考え、そこに楽しさや充実感を得ようとする傾向が、シニア学生には極めて強く確認できた。自発的な学習意欲、さらに大学での学びをきっかけにさらに深く学ぼうとし、視野を広げていくような学習のあり方もみることが出来た。入学前に心配であった語学やパソコンなどは予習・復習を熱心に行い、乗り越えている姿もみえてきた。

大学での友人関係は概ね良好で、若い学生ともに学び、大学生生活を楽しんでいた。勉強以外の面でも大学のサークル活動などを通して大学生生活をエンジョイしている様子が見えかけた。このようにシニア学生の多くは、授業だけでなく大学生生活全般に積極的な姿勢で、豊かな大学生活を過ごしていることがわかった。

### 3. 研究の目的

前述のインタビュー調査、および質問紙調査の結果からは、神戸山手大学のシニア学生は、学ぶことそれ自体を目的と考え、そこに充実感を見出そうとする傾向が顕著にみられた。しかし、シニア学生の入学動機はさまざまであり、入学後その動機や期待が満たされているのかなどについては明らかではなかった。

そこで本研究では、シニア学生の入学の動機や目的と入学後の学びの成果との関連を、2014年3月にシニア在校生全員を対象に実施した質問紙調査の再分析を通して考察する。

### 4. 質問紙調査の概要と回答者の属性

#### (1) 調査の実施概要

- ・調査対象：神戸山手大学シニア学生1年生～4年生（2014年3月時点）の在籍者
- ・調査期間と方法：2014年3月 郵送で質問紙を配布して郵送で回収記入は無記名
- ・配布数と回答数：配布数39 回収数35（※回収率89.7%）

#### (2) 調査項目

神戸山手大学に入学をしたシニア学生を対象に、以下の4つの柱で質問紙調査を実施した。神戸山手大学入学の理由や経緯、入学前の不安や障害、大学生活全般の様子、卒業後についての4つである。

#### (3) 回答者の属性

表1 男女

	回答者数	%
男性	13	37.1
女性	22	62.9
合計	35	100.0

表2 年齢

	回答者数	%
50～54歳	5	14.3
55～59歳	3	8.6
60～64歳	12	34.2
65～69歳	10	28.6
70～74歳	5	14.3
合計	35	100.0

表3 学年

	回答者数	%
1年生	6	17.1
2年生	7	20.0
3年生	7	20.0
4年生、 5年生以上	15	42.9
合計	35	100.0

### 5. 分析

#### (1) 大学入学の動機や大学生活への期待

今回の質問紙調査では大学入学の動機や大学生活への期待について質問をしている。大学入学の動機や大学生活への期待の質問項目で因子分析をおこない、4つの因子が抽出された。

質問紙にはこれ以外の質問項目、「シニア奨学金があったから」「大学が通いやすい場所にあるから」などもある。ただ、これらは入学を決定する要因ではあるが大学での学びとは直接に

は関係がないと考え、今回の因子分析では除いている。

表4 大学入学の動機や大学生活への期待についての因子分析結果

	因子1 学問追求 型の学び	因子2 一般教養 型の学び	因子3 人間関係 重視型	因子4 目的曖昧 型
自分の視野を広げたかったから	0.851	0.265	-0.130	0.223
生活を充実させたかったから	0.754	-0.131	0.005	0.634
高い専門性を身につけたかったから	0.736	0.248	0.265	-0.136
今までの生活の中で疑問に思ったことなどを知りたかったから	0.653	0.060	0.203	-0.120
神戸山手大学の教育内容に興味があったから	0.569	0.287	0.388	-0.353
大学で最新の知識や技術を学びたいと思ったから	0.565	0.405	0.390	-0.204
人生の次のステージの準備をしたかったから	0.384	-0.090	0.033	-0.042
趣味的な学びでは満足できなかったから	0.123	0.878	-0.072	0.184
幅広い一般教養を身につけたかったから	0.179	0.664	0.251	0.161
社会教育や生涯教育の講座などでは満足できなかったから	-0.053	0.653	0.174	-0.203
色々な人に会えるから	0.271	0.134	0.892	0.082
友人が欲しかったから	0.075	0.088	0.701	0.346
大学生活は楽しそうに思えたから	0.053	0.451	0.488	0.213
何もしないでいると呆けてしまうと思ったから	0.039	0.189	0.361	0.775
他にやりたいことがなかったら	-0.285	0.031	0.125	0.693
寄与率 (%)	31.41	14.52	11.42	7.87
累積寄与率 (%)	31.41	45.93	57.35	65.22

※主因子法 バリマックス法

第1は、「自分の視野を広げたかったから」「生活を充実させたかったから」「高い専門性を身につけたかったから」「今までの生活の中で疑問に思ったことなどを知りたかったから」「神戸山手大学の教育内容に興味があったから」「大学で最新の知識や技術を学びたいと思ったから」「人生の次のステージの準備をしたかったから」で、「学問追求型の学び」と命名した。第2は、「趣味的な学びでは満足できなかったから」「幅広い一般教養を身につけたかったから」「社会教育や生涯教育の講座などでは満足できなかったから」で、「一般教養型の学び」と命名した。第1と第2はいずれも学びに関してではあるが、第2は一般教養的な幅広く学びを動機にしているのに対して、第1は学ぶことに対しての知りたいという強い欲求や学ぶ内容をより深めていきたいという思いが強いといえる。

第3は、「色々な人に会えるから」「友人が欲しかったから」「大学生活は楽しそうに思えたから」で、「人間関係重視型」と命名した。第4は、「何もしないでいると呆けてしまうと思ったから」「他にやりたいことがなかったら」で、「目的曖昧型」と命名した。

シニア学生の多くは大学で熱心に勉強に取り組んでいるので、大学への入学動機や大学生活への期待などは「学ぶこと」が中心であると推測していた。しかし実際の動機としては、大学で学ぶだけでなく、大学で色々な人に会えることを期待していたり、さらに「何もすることがないから」「何もしないでいると呆けてしまうので」といった入学動機の方もいて、予想以上に多岐にわたっていることがわかる。また、学びについても一般教養的に幅広く学びたい

人と、より専門的なことを深く学びたい人がおり、学ぶことといっても一括りにはできない質の違いがある。

## (2) 入学後の学びや大学生生活全般について

今回の質問紙調査では、入学後の大学での学びから友人関係まで、大学生生活全般についての質問をしている。その中で、大学での学び、友人関係、大学生生活についての質問項目について因子分析をおこなうと、2つの因子が抽出された。

第1は、「大学に来て、今までより興味や関心を持つことの範囲や視野が広がった」「大学に入学して、学ぶことの楽しさを知った」「大学での勉強は入学前の予想よりも楽しい」「大学では、友人と助け合って勉強している (いた)」「大学で学んだことが自分の過去の経験や自分の仕事と結びついて、理解が深まったことがある」「大学の学びの中で、もっと知りたい、探求したいという気持ちになった」「若い学生と一緒に学んだり、活動することは楽しい (かった)」「年齢や国籍や経歴の違う友人が増えた」「授業で学んだことをさらに自分で自主的に調べることがある (あった)」「大学でのシニア同士の友人関係は良好である」で「学びに関する因子」と命名した。「若い学生と一緒に学んだり、活動することは楽しい (かった)」「大学では、友人と助け合って勉強している (いた)」などである。年齢を超えた協働的な学びに関する項目が含まれている点が興味深い。

第2は、「大学での若い学生との友人関係は良好である」「大学での留学生との友人関係は良

表5 入学後の大学での学びや大学生生活全般についての因子分析結果

	学びに関する因子	大学生生活全般、友人関係に関する因子
大学に来て、今までより興味や関心を持つことの範囲や視野が広がった	0.879	0.146
大学に入学して、学ぶことの楽しさを知った	0.847	0.246
大学での勉強は入学前の予想よりも楽しい	0.765	0.496
大学では、友人と助け合って勉強している (いた)	0.742	0.192
大学で学んだことが自分の過去の経験や自分の仕事と結びついて、理解が深まったことがある	0.688	0.169
大学の学びの中で、もっと知りたい、探求したいという気持ちになった	0.650	0.280
若い学生と一緒に学んだり、活動することは楽しい (かった)	0.630	0.386
年齢や国籍や経歴の違う友人が増えた	0.611	0.451
授業で学んだことをさらに自分で自主的に調べることがある (あった)	0.482	0.390
大学でのシニア同士の友人関係は良好である	0.382	0.368
大学での若い学生との友人関係は良好である	0.123	0.918
大学での留学生との友人関係は良好である	0.160	0.736
大学生生活は私にとって生きがいになっている (いた)	0.409	0.706
全体として大学生生活に充実している (いた)	0.513	0.671
私にとって大学生生活は忙しい (かった)	0.182	0.471
寄与率 (%)	34.504	24.446
累積寄与率 (%)	34.504	58.950

※主因子法 バリマックス法

※注 質問項目に「楽しい (かった)」とあるのは、2014年3月に質問紙調査を実施し4年生はすべての課程を修了しているからである。

好である」「大学生生活は私にとって生きがいになっている (いた)」「全体として大学生生活に充実している (いた)」「私にとって大学生生活は忙しい (かった)」など、直接は学びに関係しない項目である。この項目は「大学生生活全般、友人関係に関する因子」と命名した。

また、「大学でのシニア同士の友人関係は良好である」の質問項目は、因子負荷量が第1因子と第2因子でほぼ同じ値である。つまり「大学でのシニア同士の友人関係は良好である」かどうかは、学びにも、大学生生活全般（特に友人関係に関すること）にも両方に関係している。

### (3) 大学入学の理由や大学生生活への期待と大学での学びとの関係

大学入学の理由や大学生生活への期待と、入学後の大学での学びとの関係はどうなっているのであろうか。そこで、両者の関係を考察するために、表5 大学での学びや大学生生活全般についての2つの因子について回答者ごとに因子得点を計算した。

大学での学びについての違いを生じさせている要因を検討するために、表4「大学入学の動機や大学生生活への期待について」の因子分析結果の4つの因子から一つずつ質問項目を選び、因子得点を比較することにした。第1の「学問追求型の学び」の因子からは、「高い専門性を身につけたかったから」の質問項目、第2の「一般教養型の学び」の因子からは、「幅広い一般教

表6 「高い専門性を身につけたかったから」の因子得点の比較

高い専門性を身につけたかったから		学びに関する因子得点	大学生生活全般、友人関係に関する因子得点
「あてはまらない」と「あまりあてはまらない」の合計	平均値	-0.629	0.155
	回答数	9	9
	標準偏差	1.183	0.878
「あてはまる」と「ややあてはまる」の合計	平均値	0.231	-0.085
	回答数	21	21
	標準偏差	0.757	1.067
		※	n.s

表7 「幅広い一般教養を身につけたかったから」の因子得点の比較

幅広い一般教養を身につけたかったから		学びに関する因子得点	大学生生活全般、友人関係に関する因子得点
「あてはまらない」と「あまりあてはまらない」の合計	平均値	-0.512	0.094
	回答数	5	5
	標準偏差	1.198	0.873
「あてはまる」と「ややあてはまる」の合計	平均値	0.098	-0.018
	回答数	26	26
	標準偏差	0.910	1.027
		n.s	n.s

養を身につけたかったから」の質問項目、第3の「人間関係重視型の因子からは、「色々な人に出会えるから」の質問項目、第4の「目的曖昧型」の因子からは、「何もしないでいると呆けてしまうと思ったから」の質問項目を選んだ。

本調査では各質問は、「あてはまらない」「あまりあてはまらない」「ややあてはまる」「あてはまる」の4段階で回答してもらっている。しかし、回答人数が多くないため、「あてはまらない」と「あまりあてはまらない」をまとめて1群とし、「ややあてはまる」と「あてはまる」をまとめて1群とし、大学入学の動機や期待の回答を2群にして分析を行うことにした。その結果が表6～表9である。

大学入学の動機や期待の因子分析の結果の4つの因子の中から選んだ質問項目と入学後の大学での学びや大学生活全般についての結果は以下のとおりである。動機や期待の第1因子「学問追求型の学び」の質問項目「高い専門性を身につけたかったから」との関係であるが、動機や期待の第1因子「学びに関する因子」は有意差があったが、第2因子「大学生活全般、友人関係に関する因子」では有意差はなかった(表6参照)。これは、深い学びを動機としているひとは、大学でそういった学びができていくことをしめしている。

動機や期待の第2因子「一般教養型の学び」の質問項目「幅広い一般教養を身につけたかっ

表8 「色々な人に出会えるから」の因子得点の比較

色々な人に出会えるから		学びに関する因子得点	大学生活全般、友人関係に関する因子得点
「あてはまらない」と「あまりあてはまらない」の合計	平均値	-0.773	-0.444
	回答数	9	9
	標準偏差	1.150	0.988
「あてはまる」と「ややあてはまる」の合計	平均値	0.316	0.182
	回答数	22	22
	標準偏差	0.685	0.955
		※※	n.s

表9 「何もしないでいると呆けてしまうと思ったから」の因子得点の比較

何もしないでいると呆けてしまうと思ったから		学びに関する因子得点	大学生活全般、友人関係に関する因子得点
「あてはまらない」と「あまりあてはまらない」の合計	平均値	0.015	-0.364
	回答数	16	16
	標準偏差	1.016	1.036
「あてはまる」と「ややあてはまる」の合計	平均値	-0.016	0.388
	回答数	15	15
	標準偏差	0.945	0.801
		n.s	※

\*P<.05, \*\*P<.01

たから」は「学びに関する因子」「大学生生活全般、友人関係に関する因子」の両方とも有意差はなかった（表7参照）。

動機や期待の第3因子の質問項目「色々な人に出会えるから」は第1因子「学びに関する因子」は有意差があったが、第2因子「大学生生活全般、友人関係に関する因子」では有意差はなかった（表8参照）。これは予想外の結果ともいえるが、第1因子「学びに関する因子」には「若い学生と一緒に学んだり、活動することは楽しい（かった）」「大学では、友人と助け合って勉強している（いた）」の質問項目が含まれており入学後の大学での学びが、単独の学習ではなく協働的な学びになっているからであると推測される。それと同時に「色々な人に出会えるから」に、「あてはまらない」と「あまりあてはまらない」と回答した人は、第1因子「学びに関する因子」の因子得点がかかなり低く、大学での学びがスムーズにっていないことが読みとれる。「大学生生活全般、友人関係に関する因子得点」も差がなく、そういった面でも満足度が低いのではないかと考えられる。

動機や期待の第4因子「目的曖昧型」の質問項目「何もしないでいると呆けてしまうと思ったから」は、第1因子「学びに関する因子」では有意差がなかったが、第2因子「大学生生活全般、友人関係に関する因子」では有意差があった（表9参照）。大学入学の動機や期待が大学での学びにない場合、入学後に学びそのものよりも大学生生活全体の充実や若い学生や留学生との交流を楽しんでいることが示唆された。

今回の結果から特徴として、表7の「一般教養的な学びを目的」とした場合、学びの満足度も大学生生活、友人関係の満足度も高くないことである。大学の学びが、先行研究でも明らかになっているように、大学のさまざまな授業を通して、学問の広がりを実感し、学びを通してさらに学ぶ意欲が高まるといった学びの時に満足度が高まると考えられる。

また、表8の「色々な人に出会えるから」といった友人関係を目的としていなかった場合は、学びも大学生生活、友人関係の満足度も低い傾向が顕著であった。特に有意差があったのは、学びに関することである。

この結果から、大学の学びが一人で単独でおこなうというよりも、他の学生との協働的な学びとなっていることを示唆している。本学では現時点で授業にアクティブラーニングなど学びを実施する授業があまり多くは取り入れられていない。しかし、大学での学びは友人関係が学びに与える影響が大きいことを推測させる結果となっている。

#### 4. まとめと今後の課題

##### (1) まとめ

神戸山手大学での先行研究をみると、また私たちが日々接するシニア学生の熱心に勉強に取り組む姿をみると、大学への入学動機や大学生生活への期待などは、大学での学習活動そのものがあると推測していた。しかし実際には、学びだけでなく、色々な人に出会えることを期待していたり、さらに「何もすることがないから」「何もしないでいると呆けてしまうので」といった入学動機の方もいて、動機や期待は予想以上に多岐にわたっていることがわかった。



また学びについても、幅広く学ぶことを動機とする方、より専門的なことを深く学びたいという方など、期待する学びの質に違いがあることもわかった。

実際に入学後の学び、友人関係、大学生活について因子分析を行った結果、「学びに関する因子」と「大学生活全般、友人関係に関する因子」の2つが抽出された。大学生活を構成するのは学びだけではなく友人関係なども要因も大きいことが示唆された。

シニア学生の大学での大学入学の動機や期待と、入学後の大学での学びとの関連では、いくつかのことが明らかになった。学問追求型のような深い学びを動機にしている場合、大学での「学びの好循環」ともいえる学びの特徴を生じさせている。しかし、一般教養的な学びを動機にしている場合、学びの面でもまた大学生の充実や人間関係の広がりの方でもあまり成果が出ない傾向がみられる。「色々な人に出会えるから」のような新しい人間関係を求めることは、入学後の大学での学びにプラスの方向で影響があった。逆に新しい人間関係に消極的であると、学びがすすまないことが示唆された。これは大学での学びが協働的な学びであるためであると推測される。

「何もしないでいると呆けてしまうと思ったから」のように、大学入学の動機や期待が学びにはない場合、入学後は学びそのものよりも大学生活全体の充実や若い学生や留学生との交流を楽しんでいることが示唆された。

## (2) 今後の課題

上記の結果を踏まえると、大学での学びを深めていくためには、一般教養的な学びではなく深い学びの動機づけが重要なこと、またともに学ぶという姿勢、さらに新しい人間関係を作っていきたいという気持ちなどが、学びを深める点からも重要であることが示唆された。これをふまえ、シニア学生が大学での学び、大学生活そのものを充実させるために、大学としてどのような支援ができるかについて考えていくことが今後の課題である。

また、大学で学んだことや習得したことが、卒業後にどのように生かされているのかを明確にしていくことも課題である。シニアの学びは社会貢献に結びつけて考えられることが多いが、人生の次のステージでできることは社会貢献活動だけに限られているわけではない。卒業後の社会貢献活動の準備だけでなく、学ぶことを楽しむことや人との交流を楽しむことを目的としている場合も含め、シニア学生の学びの成果は何であるのか、その特徴とは何か、大学教育として何が求められているのかを明らかにしていきたい。

本学のシニア学生の多くはいわゆる「第3年代」であり、仕事をしていた人は組織を離れ退職し、家庭や地域で暮らしてきた人も親としての役割が一定程度終了しているなど、シニア学生の多くは人生の新たな局面に入っている。おそらく今後は、地域でも家庭でも今までとは異なる新たな役割をもって生活していくことが求められている。小田<sup>4)</sup>は、第3年代はそれまでの人生の過程で形成された価値観やライフスタイルなどの修正が必要になってくる世代であり、それと同時に人生の選択肢が増え、人生の目標設定やそれを実現する方法についてより主体的になる必要があること、その実現のためには自ら設定した目標実現や種々の生活課題を処

理するために必要な個人的資源としてのライフスキルを洗練し開発することが重要となると述べている。

価値観やライフスタイルなどの修正をめぐっては、本調査結果にもあったように、大学での学びの過程で「若い学生と一緒に学んだり、活動することは楽しい(かった)」「大学では、友人と助け合って勉強している(いた)」という経験が、相手の意見を丁寧に聴く力、意見の違いや立場の違いを理解する力、現状を分析し目的や課題を明らかにする力などを身につけていくことにつながっている。卒業後に社会貢献を希望している、いないにかかわらず、大学での学びがシニア学生一人ひとりの考える目標実現や種々の生活課題を処理するために必要なライフスキルの向上に、大学での学びは寄与するところが大きいはずである。

大学での学びそのものに焦点をあてる場合、例えば若い世代や留学生など考え方の異なる学生と学ぶことでコミュニケーション能力が高まる、また深く学ぶことで一つのことを多くの視点から捉える力がつき、考え方が柔軟になるなど多くの教育上の成果が予想される。こういったことはシニア学生の卒業後の目標実現のための基礎的な力となっていだろうか。これは、大学という環境で、それもシニアだけではない様々な人とかわりながら学ぶ「統合型」のカリキュラムだけが持つ、大きな意義である<sup>5)</sup>。

そして、こういった基礎力を身につけることは卒業後のシニア学生の生き方にどのような影響をもつのか、この観点からシニア学生に対して人生の次のステージの準備として大学教育として出来ることは何であるのか、考えていくべき課題は多いといえる。

## 注記・引用文献

- 1) 福原栄太郎「神戸山手大学シニア50+（フィフティプラス）入学制度への取りくみ」（『神戸山手大学紀要』11、pp.125-132、2008）
- 2) 飯嶋香織、行木敬「生涯学習におけるシニア大学生の学びのニーズ ―神戸山手大学のシニア学生を対象にした調査結果から―」（『神戸山手大学紀要』15、pp.49-58、2013）
- 3) 飯嶋香織、行木敬「生涯学習におけるシニア大学生の現状と課題 ―神戸山手大学のシニア学生を対象にした質問紙調査の結果から―」（『神戸山手大学紀要』16、pp.63-73、2014）
- 4) 小田利勝「退職に関する新たな視点とサード・エイジの生活課題：高齢期のライフスキルとサクセッフル・エイジングに関する実証研究へ向けて」（『神戸大学発達科学部研究紀要』5(2)、pp.117-133、1998）
- 5) 厚生労働省がいわゆる若い学生のために提唱する「社会人基礎力」がある。いささか大げさではあるがシニア版「学生基礎力」のようなものが想定されるのかを考えてみることは重要であると考えます。  
※厚生労働省の社会基礎力は「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力（12の能力要素）から構成され、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」としてとしている。

## その他参考文献

- ・ 出相康裕「学部段階への社会人入学の現状に関する一考察：大学の属性の影響力の視点から」（『大阪教育大学紀要Ⅱ 社会科学・生活科学』53(1)、pp.39-50、2004）
- ・ 出相康裕「市民大学受講者の大学への入学志願に対する阻害要因 ―大阪府内における受講者調査か

- ら一」(『大阪教育大学紀要第4部門教育科学』57(2)、pp.123-135、2009)
- ・堀薫夫, 福嶋順「高齢者の社会参加活動と生涯学習活動の関連に関する一考察 —大阪府老人大学修了者を事例として—」(『大阪教育大学紀要 第IV部門 教育科学』56(1)、pp.101-112、2007)
  - ・立田慶裕(研究代表)『調査研究報告書 生涯学習の学習需要の実態とその長期的変化に関する調査研究(平成22～24年度 プロジェクト)』国立教育政策研究所